

関経連、「関西ビジョン2030」策定！① 先駆ける関西、 ファーストペンギンの心意気

われわれはコロナ禍という未曾有の事態の真ただ中、時代の分かれ目にいる。
今後、関西が拓いていく未来とは、そして、関西から心躍りワクワクする価値観をどう国内外に打ち出して
いくか——。関経連の想いを示すべく、当会は12年ぶりとなる長期ビジョンの策定に着手、
2030年の関西のありたき姿とその実現に向けた関経連の取り組みの方向性を示す羅針盤として
「関西ビジョン2030～先駆ける関西、ファーストペンギンの心意気～」を2020年12月17日に公表した。
『経済人』では3回にわたり「関西ビジョン2030」を特集する。
第1回となる今号ではビジョンに込めた想いや打ち出した取り組みの方向性などを中心に紹介する。



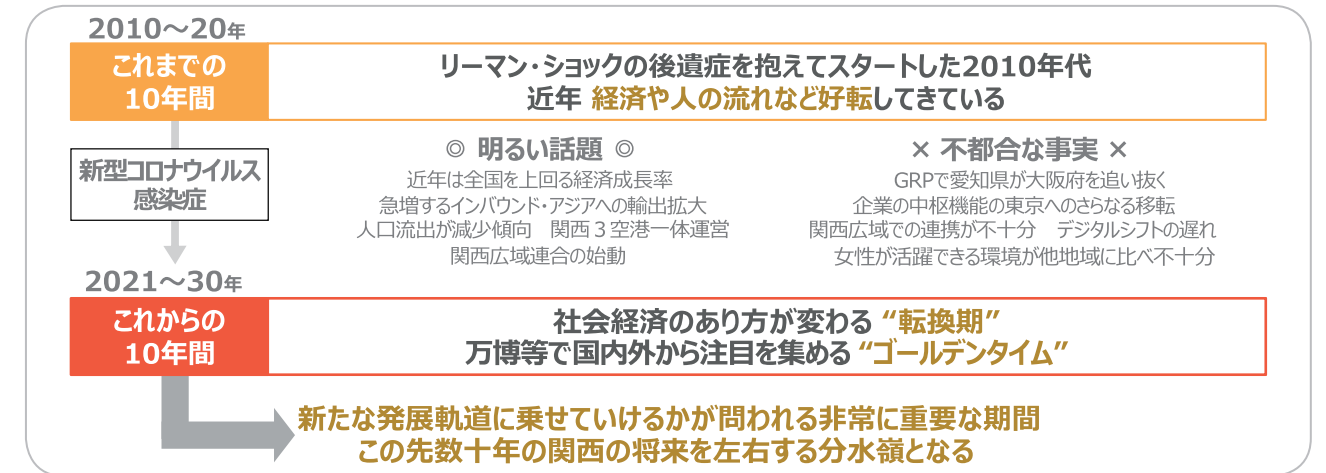
「関西ビジョン2030」 策定にあたっての想い・背景

2019年の秋、われわれは考えていた。「足元好調で、
2025年の大阪・関西万博などを控える関西。国内外から
注目されるこの好機をスプリングボードとして、関
西を新たな発展軌道に乗せていきたい」。今後の羅針
盤となるビジョンの必要性を感じ、取り組みはじめた
のが、10年後の2030年の関西のありたき姿を目標と
する「関西ビジョン2030」の策定である。

12年ぶりとなる長期ビジョンの策定に向けた検討が
進むなか、新型コロナウイルス感染症の拡大により、
世界規模で社会経済の混乱が発生。いまだ先行きが不
透明な状態が続いているが、コロナ禍が不可逆的な変
化をもたらし、その後の世界が新たなものになること
は間違いない。このような状況下で、関西はどのよう
な地域をめざしていくか、そして、その実現に当会は
どう取り組んでいくか。「関西ビジョン2030」の重要
性はさらに増すこととなった。

今回のビジョン策定にあたりまず行ったのが、関西

図1 関西を取り巻く現状と今後 ～これまでの10年・これからの10年～



自らの振り返りである。長期的視点で見ると、全国に
おける関西2府4県の域内総生産 (GRP) シェアは、
1970年の19.3%をピークに低下し、近年は約15%で
推移している。関東圏が拡大 (1970年34.2%→2016
年39.3%)、中部圏は横ばい (1970年14.0%→2016年
14.7%) となっていることと比較すると、三大都市圏に
おいて関西は一人負けの状態といえる。人口動態をみ
ても、1970年代半ば以降、東日本大震災の影響などを
除くと、一貫して首都圏への転出超過が続いている。
このように関西が長らく低迷しているという「不都合
な事実」をわれわれは真摯に受け止め、適切な危機感
を抱く必要がある。

こうした事実がある一方、直近の関西には明るい兆
しがあり、好転しつつあった。例えば、経済成長率は、
アジアへの輸出拡大、急増するインバウンドなどを背
景に、近年は全国平均を上回っていた。人口流出数も
改善傾向で、2018年には、東日本大震災の影響を除
けば46年ぶりに関西2府4県の転出者数が東海4県を
下回った。全国に比べ高かった完全失業率も近年は全
国水準に落ち着いていた。

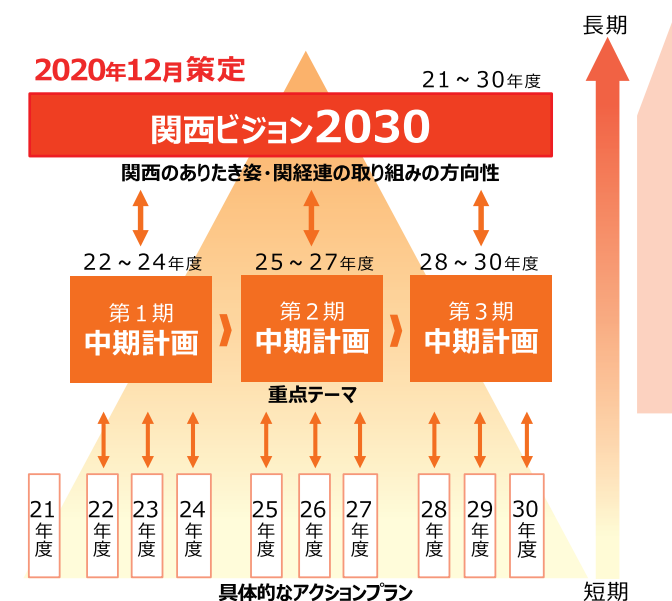
足元から将来に目を向けると、さらなる人口の減少・
少子高齢化、デジタル化をはじめとする技術の急速な
進歩、価値観の多様化など、社会経済のあり方が根本
から変わるパラダイムシフトが起こりつつあり、コロ
ナ禍を契機にこうした動きはさらに加速していくと考
えられる。2030年までの今後10年間は、社会経済の
あり方を新たな形にアップデートすべき重要な転換期
であることは間違いなく、特に重要な時期と重なる関
西にとっては、この先数十年の将来を左右する分水嶺
となる (図1)。われわれはこうした認識をベースに、ビ
ジョンの構想を進めていくこととした。

ビジョンの位置づけ・検討の経緯

当会では、これまでもビジョンに基づく3カ年の中期
計画と中期計画に基づき作成した各年度の事業計画
により事業の方向性を定め、委員会活動により各事業
を進めている。「関西ビジョン2030」は、この最上位
の概念にあたるものである (図2)。

検討プロセスとしては、事務局の中堅・若手職員な
どによる検討をまず行い、その結果をもとに、各方面
で活躍されている有識者や会員企業からのメンバーで
構成する「関西ビジョン2030」検討会において活発な
討議を重ねてブラッシュアップをはかった。さらに正
副会長と各委員会の正副委員長等による意見交換・審
議を経て策定した。

図2 「関西ビジョン2030」の位置づけ



ビジョン策定に向けたアプローチ

「関西ビジョン2030」の構想にあたっては、次の2点を強く意識した。一点目は「未来起点」。過去の延長線上ではなく、足元の変化の兆し、未来において想定されるパラダイムシフトを洞察した上で、関西のありたき姿を描いた。二点目は「関西・関経連の特色をふまえる」こと。どの地域や組織にでも当てはまる総花的なものではなく、関西・関経連ならではの視点や具体策を盛り込み、世に一石を投じる内容となるよう、議論を重ねた。

アプローチとしては、まず、前提条件として、強みやポテンシャルさらには克服すべき弱み・課題といった関西の特徴、これらに加え、コロナ禍がもたらす、または加速させると想定されるパラダイムシフトのうち、特に関西にとって重要と考えられるものを整理した(図3「前提」部分)。次に、2030年に向けて3つのフェーズ(①コロナ禍を乗り越え、これを変革の糧とする、②2025年大阪・関西万博を必ず成功させ、将来に続くレガシーを創出する、③SDGsの目標年度でもある2030年に向けて関西を新たな発展軌道に乗せていく)を設定し(図3赤枠内)、これらを念頭に置いて当会が考える2030年の関西のありたき姿、そしてビジョンを貫くコンセプトの検討に入った。

図3 ビジョン策定にあたってのアプローチ



コンセプト

先駆ける関西、ファーストペンギンの心意気

○コンセプト決定まで～まずは自らを振り返って

近世以降、関西は、江戸幕府の成立や東京奠都といった国家の重心の大変動という危機を経験してきた。その後も第2次世界大戦、激しい国際競争、阪神・淡路大震災等、これまで実に多くの困難に直面してきた。そのたびに、関西は商都や海外に開かれた窓口として、また、新産業創出の拠点や優れた研究開発拠点として、時代の変化に先駆けて対応し、発展の道を切り開いてきた。

関西経済界独自の意見表明のために1946年に設立された当会もその誕生以来、道州制の提唱(1955年)、日中経済関係の先駆けとなった国交正常化前の「訪中関西財界代表团」の派遣(1971年)、各国の大臣や商工会議所会頭に就任する人材を輩出し続けている「関経連アセアン経営研修」(1980年～)など、先駆けた取り組みを行ってきた。さらに1980年代以降は民間活力による関西国際空港や関西文化学術研究都市などの実現を主導する役割を担ってきた。このように、関西そして当会は、他に先駆けた新たな取り組みを通じてわが国の発展をけん引する風土を培ってきたのである。

しかし、バブル崩壊後の「失われた30年」のうちに、関西のダイナミックなエネルギーは弱まってしまった。

それは、長い年月をかけて培われてきた先駆けの心意気が薄れてしまったからではないか、ビジョン策定過程で出てきたこの議論にわれわれは大いに危機感を持ち、ビジョンには、この危機感を共有し、現状を打破するという強い意志を示すコンセプトが必要であると考えた。

○コンセプトに込めた想い

こうした想いに2030年、さらにその先の発展の鍵となる要素、関西の強みや弱みなども加味して検討を重ね、導き出した「関西ビジョン2030」全体を貫くコンセプトが、「先駆ける関西、ファーストペンギンの心意気」である。

「ファーストペンギン」とは、天敵がいるかもしれない海へ飛び込むことをためらっている群れの中から、エサを求めて最初に飛び込むペンギンを指す。転じて「先駆けて新たな取り組みを率先して行う精神の持ち主」に対する敬意を込めた例えとして使われている。

このコンセプトを通じて、「先駆けて取り組む企業やヒトを惹きつけ・育むことで新たな価値を生み出す地域になる、また、関西自らが先駆けとなり、社会経済の新たな姿を提示・実践していく」という、そのような心躍りワクワクする関西の将来像が幅広く共有されることを期待する。

関西の企業や大学、行政、そして関西で暮らす一人ひとり、こうしたあらゆる主体がファーストペンギンの心意気をいかに発揮し、さまざまな後押しを受けて成功事例が次々と生まれる躍動感あふれる地域に、さらにそのような関西に共感して域外から集まる企業やヒトを受け入れ、関西を舞台にだれもがファーストペンギンになることができる地域となることをめざす。

2030年の関西のありたき姿、関経連の取り組みの方向性とは (P.6図5)

○7本の矢

コンセプト「先駆ける関西、ファーストペンギンの心意気」のもと、ビジョンでは2030年の関西のありたき姿として「オープンで独創的な価値を生む経済」「ヒトを惹きつける舞台」「新たな社会モデルのトップランナー」を提示。さらにこれを実現するための当会の取り組みの方向性を「7本の矢」として掲げた。「7本の矢」は次のとおり。

- ①アジアをはじめとする世界との双方向のつながりの強化
- ②あっちこっち関西・イノベーションプロジェクト
- ③道州制実現につながる地方分権・広域行政の促進
- ④三方よしにもとづく「民の力」を効果的に発揮する仕組みづくり
- ⑤多様な人材が能力を最大限発揮できる環境整備
- ⑥心身ともに健やかになる活力ある地域づくり
- ⑦プロジェクトDX in 関西

「7本の矢」を放つにあたっては、「関西の底流にある本質」をしっかりと基盤に据え、「民の力」「大学の力」「行政の力」という3つの推進力を結集し、2つの視点「Look West」「ONE関西」をもつて的を絞り込み実行していく。

※各項目の詳細は次号以降の特集にて紹介予定。

○関経連の役割

前述のとおり、戦後間もなく、企業家精神旺盛な関西の経済人により日本経済再建のための総合研究機関として設立された関経連。今日まで設立の精神を受け継ぎ活動が続いているが、ビジョン策定に際して、当会が果たすべき役割についてもあらためて見直し、5つの役割「ビジョンとロードマップの策定」「思い切った政策提言・実現に向けた働きかけ」「実践的アクション」「関西の総意形成や地域が一体となった取り組みの先導」「アジアを中心としたグローバルな交流」を掲げた(図4)。当会自らがファーストペンギンの心意気を発揮し、関西から日本経済、ひいては世界の発展をめざしていくとの気概を持ち、関西のありたき姿の実現に向けて不退転の覚悟で挑戦していく。

※「関西ビジョン2030」全文は関経連ホームページに掲載。

(企画広報部 杉田龍飛)

図4 関経連が果たすべき5つの役割



先駆ける関西、ファーストペンギンの心意気

① オープンで 独創的な価値を生む経済

～先駆ける企業が価値を生む～

- 変化に柔軟に対応して新たな価値を生み出している
- アジアをはじめ世界との双方向のつながりが活発

関西のありたき姿

② 新たな社会モデルの トップラナー

～関西自らが先駆けとなって新たな社会を切り拓く～

- 企業による社会への関わりの新たなモデルを実践する
- 国と地方のあり方の変革をリードする
- SDGsがめざす持続可能な社会をリードする

③ ヒトを惹きつける舞台

～先駆けるヒトを育む・受け入れる～

- 先駆けの地として憧れ・選ばれる要素がそろっている
- 暮らしやすい多彩な魅力がある

2つの視点①

Look West

徹底的なアジア目線・双方向の
つながりの活性化(アジアを見よ)
西日本とのつながりの深化
(西日本を見よ)
関西独自の強みを生かす
(関西自らを見よ)

2つの視点②

ONE 関西

広域的視点による資源の最適活用
個性ある都市の有機的つながり
さまざまな関係者の結集

7本の矢

～関経連の取り組みの方向性～

1. アジアをはじめとする世界との双方向のつながりの強化
2. あっちこっち関西・イノベーションプロジェクト
3. 道州制実現につながる地方分権・広域行政の促進
4. 三方よしにもとづく「民の力」を効果的に発揮する仕組みづくり
5. 多様な人材が能力を最大限発揮できる環境整備
6. 心身ともに健やかになる活力ある地域づくり
7. プロジェクトDX in 関西

推進力

大学の力

×

民の力

×

行政の力

【 関西の強み・ポテンシャル 】

- 「進取の気性」
- 多様性や失敗に対する「寛容さ」
- 「三方よし」「利他心」
- 先端的な大学・研究機関の集積
- 暮らしやすさ・魅力ある多彩な都市
- 歴史にもとづく伝統・文化の集積、豊かな自然環境

【 関西の弱み・課題 】

- 広域での連携が不十分
- 関西としてのブランド力が十分に発信・認知されていない
- デジタルシフトの遅れ
- 女性が活躍できる環境が他地域に比べ不十分

関西の底流にある本質

- 歴史にもとづく伝統・文化
- 関西の精神

【 想定されるパラダイムシフト 】

～コロナ禍による変化含む～

- 人口増に支えられた高成長モデルから人口減を前提としたモデルへ
- アジアに対する一方通行の関係から双方向の協力による互惠関係へ
- 自前主義からオープンイノベーションへ
- 株主第一主義から多様なステークホルダーをより意識した経営へ
- 社会課題の解決に向けた企業の主体的な役割の高まりへ
- 東京一極集中から多極化へ
- 複線的で多様なライフスタイル・キャリアへ

関西のありたき姿の実現SDGs達成につながる新たな社会経済モデルの構築

Phase2

大阪関西万博をスプリングボードとした取り組み推進レガシーづくり

Phase1

コロナ禍の影響の克服それを契機とした変革